

『紐育新報』と邦人美術展覧会

——角田柳作の The Japanese Culture Centre とのかかわり——

佐藤麻衣

I はじめに

アメリカ東海岸のニューヨークでは19世紀末から商業貿易を目的にした日系企業や銀行の進出にともない官吏や商社に勤める商人、労働者などにより邦人社会が形成され、戦前まで『日米週報』（1919年から『日米時報』と改題）と『紐育新報』の二大邦字新聞が発行されている。

本稿で取り上げる『紐育新報』は1911年6月に甲斐健一が発行した邦字新聞で、発刊当初は発行部数400から500部の週刊新聞だったが、1917年からは毎週2回発行となり¹⁾、日本やアメリカ社会の情勢、在留邦人社会の近況などを伝える媒体であった。

在留邦人の増加にともないニューヨークでは1914年に日本人会が設立されている。その中心となった日系企業の中には東洋の美術品を扱う貿易商もあり、そこには日本で美術教育を受けた画家たちも従事していた。1910年代にはこれらの日本人画家たちを中心に紐育日本美術協会主催の展覧会が開催され²⁾、1922年には労働や修学目的で渡米し、アメリカで美術教育を受けた移民画家たちを中心とした画彫会の展覧会も開催されている³⁾。

また当時のニューヨークの美術界は、The National Academyなどで展覧会が開催されているほか、新進画家たちによって1917年にThe Society of Independent Artistsが設立され、無審査、無償で作品を展示する年次展覧会には日本人画家たちも出品している。

戦前期のアメリカにおける日本人画家には国吉康雄や石垣栄太郎、清水登之などがあげられ、近年、渡米画家をテーマにした展覧会や図録などにより、日本人画家たちのアメリカでの創作活動が明らかにされつつある⁴⁾。

このうち浅野徹は、1922年の画彫会の展覧会や1927年と1935年、1947年に開催された邦人美術展覧会の出品者を取り上げて、ニューヨークの日本人画家の活動についてふれている⁵⁾。また安來正博は、石垣栄太郎の新聞スクラップ資料と邦人美術展覧会の出品目録の調査から、石垣栄太郎を中心にアメリカの日本人画家たちの活動を述べているが⁶⁾、石垣の新聞スクラップ資料は、1920年代のThe Society of Independent Artistsの記事や1936年の石垣の個展に関するもののほか、The American Artists Congressに関する英字新聞の記事がほとんどで、掲載日時や掲載紙の不明なものも多く、本稿で取り上げる1927年の紐育新報社主催邦人美術展覧会に関する記事は、1927年2月20日の*The New York Herald Tribune*のみである。安來はこの新聞記事について、紐育新報社主催の展覧会は日本人画家の集りをうたっているため、作品に表れた日本の伝統文化の関連性を指摘するのはやむを得ないが、むしろニューヨークの美術界での日本人画家たちの状況に注目すべきだと評しており⁷⁾、この記事だけでは、なぜアメリカにおける日本人の芸術活動と日本の伝統文化の関連性が指摘されたのか、また1927年の邦人美術展覧会が

開催された趣旨も判明しない。

しかし、この展覧会の批評は *The New York Herald Tribune* のほかにも『紐育新報』や『日米時報』、*The New York Times*、*The New York Evening Post*、*The Christian Science Monitor* にも取り上げられていたことが調査で明らかになった。

さらに『紐育新報』の紙面をたどってゆくと、1920年代のニューヨークでは日本人会の書記長を務める角田柳作の *The Japanese Culture Centre*⁸⁾ の設立に向けた、日本の文化をアメリカに紹介する事業が動き始めていることから、邦人美術展覧会の開催は *The Japanese Culture Centre* との関わりがあったのではないだろうか。

そこで本稿では、1927年に紐育新報社主催で開催された邦人美術展覧会と新聞記事に着目し、展覧会の出品目録と『日米時報』と『紐育新報』、そして英字新聞に掲載された美術展に関する記事を資料として、紐育新報社が展覧会を主催した意義と趣旨、そしてこの展覧会と角田柳作の *The Japanese Culture Centre* とのかかわりを検討することを目的としている。

Ⅱ アメリカの美術界と日本人画家

1910年代のニューヨークには、霜鳥之彦や葦原曠など京都工芸高等学校や東京美術学校で絵を学んだ画家たちが、洋画研究などの目的で滞在しており、彼らを中心に1917年と1918年に紐育日本美術協会主催で邦人美術展覧会が開催されている⁹⁾。

しかし1920年代になると、国吉康雄や、石垣栄太郎などのように出稼ぎ目的の移民として渡米し、アメリカで美術教育を受けた画家たちが増えてくる。彼らの多くは、アメリカ西海岸の都市でスクールボーイや農業などに従事する傍ら、創作活動に目覚め、アメリカ各地の美術学校で学んだ後にニューヨークへと移動してきた。1920年にはこれらの渡米画家を中心に「画彫会」が結成され、1922年に日系企業の後援で展覧会も開催されている¹⁰⁾。

また同時期のアメリカ美術界では、*The National Academy* をはじめとする保守的な画派や1913年の *The Armory Show*¹¹⁾ 以後アメリカ美術界に進出してきた未来派、立体派などのヨーロッパの近代絵画、*John Sloan* に代表されるアッシュカンスクール派などの新進画家たちが活躍し始め、1917年に設立された無審査、無償で作品を展示する *The Society of Independent Artists* を中心にアメリカ画壇では新派と旧派が入り交じった時期だった。

ニューヨークの日本人画家の中にも *The National Academy* に出品するものもいたが、*The Society of Independent Artists* や同会から枝分かれする形で1922年に設立された *Salons of America* には、ディレクターを務める国吉康雄をはじめ多くの日本人画家が作品を発表し、英字新聞の美術欄でも取り上げられるようになる。

例えば、1927年の邦人美術展覧会にも出品された作品を上げると、ニューヨークの賭博場を描いた藤岡昇の《アメリカ魂 (*American Spirit*)》とニューヨークの街の雑踏を描いた清水清の《十四丁目 (*14th Street*)》は1926年の *The Society of Independent Artists* の年次展覧会に出品されており¹²⁾、*The World* (21 March 1926)¹³⁾ では日本人画家はアメリカ人の見過ごしていた題材を描いているとし、その例として藤岡の《アメリカ魂》、清水清の《十四丁目》、石垣の《行列聖歌 1925 (*Processional 1925*)》¹⁴⁾ を上げている。このほかにも *The New York Times Magazine*

(21 March 1926)¹⁵⁾では藤岡の《アメリカ魂》に用いられた遠近法の技法はオペラグラスを逆から覗いた時の様に人物が縮小して見えると評しているほか、清水清の《十四丁目》はモダニズムを装っているが写実的な細部の描写が民族的であるとし、新進画家の作品はあまり評価されていない。いっぽう 1926 年の Salons of America にも出品した平本正次の《踊女 (Dancer)》¹⁶⁾は彼の代表作《ロダン (Rodin)》に匹敵するできだとしている。

また、ニューヨークの街を背景に尼僧と現代風な女性を描いた、石垣栄太郎の《尼僧と少女 (Nuns and Flappers)》は 1925 年の Salons of America に出品され、*The New York Evening Post* (31 October 1925)¹⁷⁾では、同会に出品された藤岡昇の《凝視 (Note of Admiration)》、清水清の《バーレスク (Burlesque)》と共に西洋を新鮮な眼差しで描いていると評している。

そのほかにも、犬飼恭平の自画像《反映 (Reflection)》は 1918 年の The National Academy などアメリカの展覧会に数回にわたり出品された彼の代表作であり¹⁸⁾、横浜の夜の風景を描いた清水登之の《横浜の夜 (Yokohama Night)》は 1921 年の The Art Institute of Chicago の年次展覧会で Augustus 賞の受賞を外国人という理由で取り下げられ話題となった作品¹⁹⁾である。

このように 1920 年代には、アメリカの美術展に多くの日本人画家が作品を発表し、英字新聞の美術欄ではこれらの作品の題材に注目が集っている。

Ⅲ 紐育新報社主催邦人美術展覧会と The Japanese Culture Centre

日本人画家のアメリカ画壇への進出を背景に、画彫会主催の展覧会以後、資金面の問題もあり立ち消えとなっていた邦人美術展覧会が、紐育新報社主催で 1927 年 2 月 16 日から 3 月 5 日まで The Art Center で 25 名 55 点の作品を展示して開催されることになる²⁰⁾。

開催に先立ち『紐育新報』には次のような広告が掲載されている。

日本人美術家の作品が漸く米国の美術界にその価値を認められる機会に到達したことは、文化を通じて国と国との親交を温めることを理想とする我々在留民にとりては、まことに喜ばしい現象であります。(略) 本社同人は、一は以てこれ等美術家諸氏が平素の努力に酬ゆると共に、美術を通じて更らにアメリカとの国交を温める意味に於て、美術を鑑賞される人々の賛同を得たる上、本社主催の第一回邦人美術展覧会を開催することと致しました。(『紐育新報』1926 年 11 月 17 日)²¹⁾

ここにはアメリカ画壇での日本人画家の活躍を背景に、文化を通じた国交親善を理想として邦人美術展覧会の開催があげられている。さらに展覧会開催の直前にも次のような記事がある。

この計画は、当時も発表した如く、一は以てこの世智辛いニューヨークの大都会にありて、外国人としてのハンデキャップを課せられているのみならず、常に生活苦に直面しながら尚ほ且芸術境に生きつつあるこれ等邦人美術家の努力と、その力作を広く世に紹介し、実生活者の眼から見るならば、算盤の世界に埋もれている草木をして、光りを吸はしめんとするにある。更らに我々は、これを機会として日本に生れ、日本の血を受けたこれ等美術

家が、いかに泰西の思潮に同化し、そこに創造的努力を試みつつあるかを、この国の人々の鋭い批判に求めんと欲するのである。

芸術に国境なしとは古昔から云ひ尽された言葉であるが、米国美術壇の檜舞台であるこのニューヨーク市に於て、斯く多数の邦人美術家を網羅した展覧会を開催し得ることは、日本とアメリカの文化的接近を増進すべき一助たるを疑はぬ。共に意義ある催しとして、在留同胞諸氏の協賛を希ふ所以である。（『紐育新報』1927年2月12日）²²⁾

これらの記事から紐育新報社主催の邦人美術展覧会は、アメリカにおける日本人画家の作品をアメリカ画壇に紹介し、「文化を通じて国と国との親交を温め」、「日本とアメリカの文化的接近」を図る目的で開催されたのである。このような開催の意図はそれまでの邦人美術展覧会では明確にされていない。ではなぜこのような目的で1927年の展覧会は開催されたのだろうか。

その背景には、1929年に設立されるThe Japanese Culture Centre²³⁾と関係があるのではないだろうか。この展覧会の開催が発表される一月前の1926年10月に角田柳作はThe Japanese Culture Centre 設立の趣意書を関係機関に配り²⁴⁾、趣意書は『紐育新報』にも掲載されている。

The Japanese Culture Centre とは、簡単に申さば日本二千有余年文化の実相と、其文化が他国異種の特に西洋の、又特に米国の文化と接触せる際に起った問題の真相を明らかにする為めに、第一に根本資料の蒐集整理展覧、第二に其調査研究報告等を使命とする機関で、資料の蒐集展覧といふ方面からは一種小形の日本博物館、展覧会、陳列所で、邦文のものは勿論、世界各国語で出版せられた日本及日本人に関する図書の整備といふ方面からは小規模の日本図書館、また相当包括的に組織的に調査研究を継続する点からは変態の単科大学、常例講壇を設け、調査研究の結果を公演する点からは宗教宗派を超越せる特種の教団、或は図書の刊行に、或は通信に、或は招請に応じて広く日本文化の説明紹介にあたるといふ側からは文化情報局と申せぬ事ありません。（略）国家文明の交会接触する場合には文化は必ず国家国民の政治的経済的活動と相須って、国交を深厚にする上に特別の働をする従って欧米各国が交りを海外に求める際には、屹度文化を先頭に立てる。（略）文化事業の本質的価値は単に政治経済と相須ち相輔けて国交を深厚ならしむるにあるのみではなく、却て幾何米国文化の集大成に貢献し、裨補する所に見出さる可きである。（『紐育新報』1926年10月13日）²⁵⁾

角田柳作はハワイ時代からThe Japanese Culture Centreの中核となる「東西文明の渾融」²⁶⁾を提唱しているが、趣意書にある日本の文化がアメリカの文化に接触したときに起った問題の真相を明らかにするという事業設立の目的は、邦人美術展覧会開催の趣旨である「邦人美術家の努力と、その力作を広く世に紹介し」、「日本に生れ、日本の血を受けたこれ等美術家が、いかに泰西の思潮に同化し、そこに創造的努力を試みつつあるかを、この国の人々の鋭い批判に求めんと欲する」（『紐育新報』1927年2月12日）²⁷⁾と同じであり、文化による国交親善は、「日本人美術家の作品が漸く米国の美術界にその価値を認められる機会に到達したことは、文化を通じて国と国との親交を温めるることを理想とする我々在留民にとりては、まことに喜ばしい

現象」（『紐育新報』1926年11月17日）^{28）}という点と一致する。

また角田は、The Japanese Culture Centre を設立するために1926年に日本人会の書記長を辞しており、趣意書の印刷や発表には日本人会の役員を務める紐育新報社の水谷渉三の協力があったと述べている（『紐育新報』1931年12月30日）。^{29）}このことから紐育新報社が邦人美術展覧会を開催した背景には、新聞という定期的に情報を提供する媒体を利用して、日本人会とかかわりがある角田柳作のThe Japanese Culture Centre が掲げる文化を通じた国交親善を邦人社会に促す目的があったのだと考えられる。

Ⅳ 招待会と美術展評

紐育新報社主催の邦人美術展覧会がThe Japanese Culture Centre 設立に向けた事業の一環として日米の文化交流を目指していたことがわかる点は他にもある。それは日本人画家の展覧会でありながら、The Society of Independent Artists の役員を務めるJohn Sloan, Walter Pach, Rockwell Kent 等、アメリカ画壇で活躍する新進画家と1922年からSalons of America のディレクターを務める国吉康雄が審査委員（後に顧問とする）となったこと（『紐育新報』1926年12月4日）^{30）}であり、アメリカ画壇で名の通るこれらの画家たちを委員とすることで、この展覧会を通じて東西文化の融合をアメリカ社会にも伝えることが目的だったのではないだろうか。

さらに、展覧会初日の1927年2月16日には英字新聞の記者も招待したレセプションが開かれ（『紐育新報』1927年2月19日）^{31）}、英字新聞には同展覧会の批評が掲載されている。

たとえば *The New York Times* では次のように述べている。

These artists for the most part have emptied their consciousness of the attributes most prized by their gifted ancestors and are working with Western methods from what they doubtless feel is a Western point of view. Of course, the point of view cannot be that, and through the confusion of artistic idiom the American public hardly can fail to shrink somewhat from an imitation that suggests mockery.

The most interesting work in which the artist has preserved fragments of New York as it might appear to a New Yorker of any race is by Noboru Foujioka in his “Strap Hangers” and “Charleston.”

To turn from the restless scenes and the not fully disciplined methods inspired by our America to Mrs. Yukiko Murata’s “A Spring Evening” and Ryuko Saito’s beautiful portrait of a room is to realize the immense value of traditional taste and the infinite difficulty of applying traditional taste to matters outside its tradition. (*The New York Times* 20 February 1927) ³²⁾

ここで注目したいのは、*The New York Times* に掲載されたこの美術展の批評が邦字新聞に次のように翻訳されていることである。

是等多数の日本人美術家諸氏は打ち見た処日本人として祖先から受けた最も尊い賜物を捨

てて何処までも泰西思潮とその実際に近づかうと焦り、従てその観察眼は泰西化したものと思惟しているらしいけれどもそれが泰西の観察眼でないことは勿論である。この芸術的混乱は己むを得ないものであらうが、而かも米人の眼から見るならばそれがいかにも沐猴に冠と云ったやうな感じから免れることは出来ない。が、この中でも最も興味あるニューヨークの生活断片として見るべきものは藤岡昇君の「チャールストン」と「地下鉄の午後」であり、一刻をも争ふやうな忙がしいアメリカ人にとって印象を深めるものは村田雪子女史の「春宵」と齋藤龍江氏の画にして、これは伝統の力のいかに尊いものであるかを示すと共に伝統を離れてものを味ふことのいかに難かしいものであるかを物語っている。(『紐育新報』1927年2月26日)³³⁾

批評の内容を見ると、出品作品には日本人の西洋化に対する努力は見られるが、西洋画の模倣だという指摘もあり、日本画には伝統が表れていると評価されている。

別の英字新聞にも展覧会の批評はある。では *The New York Herald Tribune* の評を見てみよう。

The whole question as to the persistence of racial traits in art is brought up again by the first annual exhibition made by Japanese artists living and working in New York. Some fifty-odd examples of their painting and sculpture have been assembled at the Art Center by "The Japanese Times." From this collection it is clear enough that the contemporary Japanese has talent. One picture alone, the "Yokohama Night" of Mr. Toshi Shimizu, would prove that. It is a beautiful treatment of a crowded urban theme. There are several other pieces which make the same excellent demonstration of technical skill. And the interesting thing is the way in which the truest source of that skill appears to be a purely Japanese spring. The presence of a few paintings well executed according to a Western hypothesis does not obscure this fact. The Whistlerian "Young Girl" of Mr. Tetsuen Tera, the accomplished paintings by Mr. Kyohei Inukai, the clever "Fisherman's Village" of the late Mr. Kentaro Kato disclose, no doubt, remarkable adaptability, But the testimony of the collection as a whole is all toward the establishment of a national habit of mind as inalienably national. Two or three of the pictures are frankly derivative from the old Japanese tradition, the "Interior" by Mr. Ryuko Saito, the "Spring Evening" of Mrs. Yoriko Murata. The painters in these seem at ease and their work is [sic] convincing. The many things that have proceeded out of Oriental minds under the pressure of Western modes are frankly, mediocre and quite uninteresting. Only once is this judgment reversed, in the case of Mr. Eitaro Ishigaki, the painter of "Nuns and Flappers," and in this the arresting point is that at which the artist deviates from his Western mood into a linear idiom recalling his native school. In a word, the Japanese pays us a charming compliment, when he turns to our artistic habit, but he is most rewarding when he adheres to his own and remains absolutely Japanese. (*The New York Herald Tribune* 20 February 1927)³⁴⁾

この記事は『紐育新報』では以下のように掲載している。

紐育新報社主催紐育在留日本人美術家の展覧会は我々の前に再び美術に対する民族の固執性といふ問題を提供して呉れた。日本人の美術に対する才幹はこの展覧会で遺憾なく発揮されていることは、清水登之氏の『横浜の夜』のみでも立証され得る。若しそれ技巧上の優秀な表現は幾多の出品に発見し得るが、特に我等の興味を惹くのはその源泉が純真な日本人味に満ちていることである。素より泰西の流れを汲んだ幾多の画即ちウイスラーばりな寺徹圓氏の『少女』犬飼恭平氏の完全に近い油絵、加藤健太郎氏の『漁村』など彼等の同化性を優秀に発揮したものもあるけれどもこれによりて日本人味を消すやうなことはないのみならず、展覧会の全般を通じて受ける印象は彼等の国民性なるものが鮮明に示されていることである。これ等の中に二三点即ち齋藤龍江氏の『迎客有情』村田雪子夫人の『春宵』等は日本古来の伝統に発した絵画で如何にも自然にのんびりとした筆致を見ることが出来る。同時に泰西の思潮に圧迫されて東洋人的な心性を失った幾多の絵は遠慮なく云へば極めて平々凡々である。併し斯うした絵画の中にも石垣栄太郎氏の『尼僧と少女』の如き除外例はある。この画に於て彼は泰西の感化から離れて日本人らしい線の動きを見せている。換言すれば日本人がその美術的習性を泰西化していることは我々に対する大きなコンプリメントではあるが、日本人は飽くまでも日本人としての習性に忠実であることは彼等に対する最も大きな報ひであらなければならない（『紐育新報』1927年2月23日）³⁵⁾

この評では、日本人画家が西洋画の技法を習得している点や日本人としての個性が作品に表れているが、日本人としての特異性が表れていないものは平凡だと指摘しており、技法や題材において日本人画家という個性を明確に表していくことを求めているのだろう。

また、*The Christian Science Monitor* は次のように評している。

Current attractions in the New York art galleries present a wide miscellany that includes Japanese, Russian, Finnish, French, Swedish, Chinese, Mexican, and American works. At the Art Center the first annual exhibition of paintings and sculpture by local Japanese artists in progress. This affair is being held under the auspices of the Japanese Times, and shows how quick these Eastern artists are in adopting Western art forms and making themselves at home therein.

There are few paintings here done in the traditional Japanese manner, but for the most part the canvases are idiomatic transpositions in the present-day American mode. Here and there the sharper accents of the now accepted modernist is found echoing off these Oriental palettes, notably in the case of Yasuo Kuniyoshi who has enjoyed the distinction these several years of being one of the outstanding humorists in the local ranks. His portraits of twin circus ladies in russet regalia and infant twins all bouncing and blonde are works only for those who have reached that crucial point of taking their art with a liberal admixture of the ridiculous. Toshi Shimizu's "Yokohama Night" is a handsome piece of patterning with much structural solidity, and Kyohei Inukai's self-portrait is a seriously wrought canvas in the academic Western style. Noboru Foujioka also makes merry with his sprightly "Charleston" a la Peggy

Bacon, as does Eitaro Ishigaki with his topical "Traffic Problem." Mrs. Yukiko Murata and Ryuko Saito are the only ones who still follow the lines of their native teaching. (*The Christian Science Monitor* 24 February 1927) ³⁶⁾

この記事、『紐育新報』では次のように掲載している。

現在ニューヨークの画壇には日本人、ロシア人、フランス人、瑞典人、メキシコ人、アメリカ人等と各国の美術家が展覧会を開いて居るが就中我々の興味を惹くのは日本人の美術展覧会であらう、これは紐育新報社が主催蒐集した画展であるが、作品を通じて我等はこれ等東方の民族が泰西の文化を会得するにいかにか巧妙であるかを窺知し得る、尤も多くの画風は現代アメリカのモードをその儘移したもので太い線で貫く所謂モダニストの画風が、これ等東洋人に反響されて居る。特に目を惹くのは過去数年に亘り米国画壇に聞えて居る国吉康雄君のヒュモアに満ちた作品で二人のサーカス女、二人の小供等は蓋し雄なるものであらう。清水登之君の横浜の夜は最も組織的な筆致で描かれた力作であり、犬飼恭平君の反映は泰西官学派の好標本であり、藤岡昇君のチャールストン、石垣栄太郎君の交通難題等はア・ラ・ペギー・ベーコン式な画として面白い(『紐育新報』1927年3月2日) ³⁷⁾

ここでは、アメリカ近代絵画の影響が見られる作品として国吉、清水、犬飼、藤岡、石垣を例に取り上げて、日本人が西洋文化を巧みに享受していることを指摘しているが、日本の文化の影響が作品に表れているか否かについてはふれられていない。

このほか、*The New York Evening Post* は次のように述べている。

It does not seem a tragedy that the East and West should "never meet," for they are more interesting when speaking in their own idioms. This is apparent in this exhibition. There is no dearth of talent, but one conjectures it might achieve more in Oriental tradition than in Western speech.

Many of these artists are already familiar to exhibition frequenters. Shimizu, Kuniyoshi, Foujioka and Ishigaki, for example, have exhibited in group shows and individually.

In many ways the studies of American life by these Japanese artists form a tremendous indictment of our Western civilization. "Charleston," or "American Spirit," by Noboru Foujioka; "The Carpenter's Shop," by Bunpei Ushui; "Fourteenth Street," by Kiyoshi Shimizu, reflect the frenzy of living which characterizes us evidently in the eyes of outside peoples. It is hardly a pleasing reflection from a mirror held up to a display of frantic and rather unreasoning activity.

On the contrary, the paintings that retain the Oriental tradition in some degree have great charm and effectiveness. A group by Mrs. Yukiko Murata, an "Interior," by Ryuko Saito, the delicate vision of "Fisherman's Village," by the late Kentaro Kato, or Toshi Shimizu's "Yokohama Night" are here to reveal the power of these talented artists when working in terms of their own tradition. (*The New York Evening Post* 26 February 1927) ³⁸⁾

この記事が『紐育新報』では次のように掲載している。

ニューヨークタ刊ポスト紙はこの土曜日の美術欄に長文の批評を掲げ、『東は東、西は西』の詩句を引例して泰西式な力作品の中にひしめく伝統の力の偉大さを謳歌し『これ等日本人の眼に映じた鋭い批評が種々な作品に現れて居る、藤岡昇君のアメリカ魂、白井文平君の工場、清水清君の十四丁目等是我々の狂気染みた生活に対する外来者の観察である。而かもこのフランテックなそして常に不合理な生活の反映なるものは見る者にとって決して愉快なことではない。これに反して東洋の伝統的な絵画に対し我々は画としての美しさと強さを観取し得る。即ち村田雪子さんの春宵や齋藤龍江氏の画、加藤健太郎氏の漁村、清水登之君の横浜の夜等は天賦の豊かなこれ等芸術家の伝統を踏襲したものとして興味を与える』（『紐育新報』1927年3月2日）³⁹⁾

冒頭部分に Kipling の「The Ballad of East and West」の引用があると指摘したうえで、出品作品には日本人の個性が十分に表れているが、東洋風な画の伝統の中に日本人としての個性がより表れていると評価している。これら英字新聞の批評には、アメリカ近代絵画の影響や日本人としての個性を作品に反映させることを求めた評が多く、アメリカで絵画の技法を学んだ日本人画家にとって、題材や技法などの創作の方向性について課題を見出すこととなっただろう。

このように邦人美術展の批評が英字新聞に取り上げられたことは、日本人画家が祖国日本の伝統文化を受け継ぎつつも、いかにアメリカの文化を享受し作品に反映させているかをアメリカ社会に伝えている。また、邦字新聞が英字新聞の美術欄の翻訳を掲載したことは、邦人美術展覧会に関するアメリカ側の評価を日本人社会に伝え、在留邦人が文化芸術を通じて東西の融合をすすめていくための課題を見出す契機となっただろう。

紐育新報社主催の邦人美術展覧会は、展覧会の本来の目的である作品の売却や画家たちの創作活動を伝えるメディアとしてだけでなく、新聞社が主催することで定期的に一度に複数の場所や人々に情報を伝えることが可能な新聞の紙面を利用して、遠隔地の読者にも日本人画家たちの活動を伝えるとともに、日本人会とかかわりがある角田柳作の The Japanese Culture Centre の設立に向けた事業の一つとして、アメリカ社会と日本人社会の相互に文化的交流を促す意図があったのだろう。

V おわりに

国吉康雄は、1922年の『紐育新報』に次のような記事を発表している。

背景の無い米国、直覚的にコムマアシャリズムを想像させる米人、この空気に囲まれて居る米国は——芸術を要求しない。この米国にどうして本統の芸術が生れやう。自分は今少し真面目な空気に触れたい。こんな処にぐずぐずして居れば自分の持つてゐるピュアなソールまでコムマアシャライズされてしまふであらう……。

私の或る友人はこんな理由で欧州へ旅立った（略）然しこの商売的な米国にもウォルト・ホイットマンが生れ、エー・ビー・ライダアの様な画家も生れた。米国を非芸術国とするよりか、今少し大きな心を持って自然の美を感受し得たならば、このアメリカの空気も其研究者に対して、ライダアに対するが如く又ホイットマンに向った如く、偉大な自然美を感じ得さすであらう。

独歩の曰く『山林に入りて自由なる靈に接するを要せず。自由なる靈は到る処にあり』（『紐育新報』1922年2月18日）⁴⁰⁾

商売的で非芸術国とされていたアメリカを背景にアメリカの芸術家は生まれた。この記事が掲載された1922年のニューヨークでは、日本に生まれアメリカで美術を学んだ日本人画家たちがアメリカの画壇に進出している。彼等の活躍を背景に、1927年に紐育新報社主催で邦人美術展覧会が開催された。

この展覧会は、アメリカにおける日本人画家の創作活動をアメリカ社会に伝え、日米親善と文化接近を図る目的で開催されており、展覧会開催の意図は角田柳作のThe Japanese Culture Centreの趣意書の内容と一致している。

また展覧会の批評は英字新聞にも取り上げられ、そこには日本人の絵画は西洋文化を巧みに享受しているという評価もあるが、日本人としての個性を作品に反映させていくべきであるとの指摘もある。このような評から1920年代後半のアメリカにおける日本人画家たちの創作活動は、彼等の祖国である日本と現在生活しているアメリカの両方の文化を芸術作品にいかにか反映させていくのかを模索する時期だったと考えられる。

さらに展覧会閉会後の1927年4月には国吉康雄を中心に「美術同人会」が結成されている。

私等洋画彫刻家が集って此たび美術同人研究会を作りました。根本的に自分等の頭脳を練り共に技術の上達を講究しやうと云ふのです。広く米国現時の画壇を一見致しますと吾等日本人美術家は相当芸術的に地位もあり了解もされて居ます。それを今一層土台から築き上げて心強い団体とするのです。（略）筆ばかり練達しても思想が伴はなければ駄目です。それが為の研究所が出来ました。（略）芸術に依って東西の理解を進める事は俗的に依ってよりも根本的であり又常に白人間に活動している私等は一層此団体によって奥深く触れる事ができるのです。それを完成するには無論在留邦人諸君の援助を多とするのであります。（『日米時報』1927年4月30日）⁴¹⁾

国吉は、アメリカ画壇で創作活動をしている日本人画家はその立場を活かして芸術作品を通して東西の文化の理解を進めていくことが必要だと述べている。

角田柳作はThe Japanese Culture Centreを設立するための資金調達、資料蒐集を目的に帰朝しており1927年の展覧会を見ていない。しかし角田の援助者である水谷渉三が経営する紐育新報社主催で邦人美術展覧会が開催され、美術を通して東西の文化交流の働きかけがあった。

それまでの紐育日本美術協会や画彫会主催の展覧会は日系企業の後援で開催されたが、1927年の展覧会は、日本人会の役員が経営に携わる邦字新聞社が主催することで、定期的に一度に

複数の場所や人々に情報を伝達するのに有効な手段であった新聞という媒体を通じて、アメリカにおける日本人画家の芸術活動とアメリカ社会の反響を様々な地域、階層の読者に広く伝えた点に意義があり、日本人会ともかかわりがある The Japanese Culture Centre の設立に向けた日米文化交流事業の一つの試みだったのである。

附記

本稿に関する調査・研究では Columbia University Butler Library, 同 C.V. Starr East Asian Library, 同 Avery Architectural & Fine Arts Library, Harvard University Harvard- Yenching Library, The Center for Research Libraries, The Frick Art Reference Library, The Thomas J. Watson Library, The New York Public Library, The Archives of American Art, Smithsonian Institution, 東京大学総合図書館, 外交資料館, 和歌山県立近代美術館, 太地町立石垣記念館をはじめ、多くの方々にご協力をいただいた。末尾ながら厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 蝦原八郎『海外邦字新聞雑誌史』（学而書院、1936年）、209頁。
- 2) 紐育日本美術協会主催第一回展は1917年3月12日から3月24日までThe Yamanaka Galleriesで開催、出品目録はThe Archives of American Art, Smithsonian Institutionに所蔵されている。第二回展は1918年2月2日から2月10日までThe MacDowell Clubで開催、出品目録はThe Frick Art Reference Libraryに所蔵されている。
- 3) 1922年11月1日から11月21日までThe Civic Clubで開催、出品目録は和歌山県太地町立石垣記念館に所蔵されている。
- 4) 『アメリカに学んだ日本の画家たち 国吉・清水・石垣・野田とアメリカン・シーン絵画』〔展覧会図録〕（東京国立近代美術館他、1982年）；『太平洋を越えた日本の画家たち展 アメリカに学んだ18人』〔展覧会図録〕（和歌山県立近代美術館他、1987年）；『アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀1896-1945』（終戦50年企画）〔展覧会図録〕（東京都庭園美術館他、1995年）；『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』〔展覧会図録〕（和歌山県立近代美術館、1997）
- 5) 浅野徹「大正・昭和前期の在米画家についてのノート」『太平洋を越えた日本の画家たち展 アメリカに学んだ18人』〔展覧会図録〕（和歌山県立近代美術館他、1987年）、76-82頁
- 6) 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察（1）」『和歌山県立近代美術館紀要』第1号（1996年）、15-66頁；「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察（2）」『和歌山県立近代美術館紀要』第2号（1997年）、55-103頁；「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡—」『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』〔展覧会図録〕（和歌山県立近代美術館、1997年）、57-64頁
- 7) 安來正博「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡」『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』〔展覧会図録〕（和歌山県立近代美術館、1997年）、60頁
- 8) 角田柳作のThe Japanese Culture Centreは、1928年3月に日本側で「日米文化学会」が、1929年7月にアメリカ側で「Japanese Culture Centre」がそれぞれ設立されている。それ以前の資料では「The Japanese Culture Centre」という名称となっているため本稿では名称を英字で統一した。またこの事業については、荻野富士夫『太平洋の架橋者 角田柳作「日本学」のSENSEI』（芙蓉書房、2011年）；内海孝「角田柳作のハワイ時代 一九〇九年の渡布前後をめぐって」『早稲田大学史記要』第30巻〈通巻34〉（1998年）、121-174頁；「角田柳作のハワイ時代再論 一九〇九年～一七年の滞在時機を中心に」『早稲田大学史記要』第31巻〈通巻35〉（1999年）、91-124頁；「角田柳作のコロラド時代 コロンビア

- 大学「日本学」生誕前夜をめぐって」『東京外国語大学論集』第75号（2007年）、235-268頁に詳しい。
- 9) 前掲2)
 - 10) 前掲3)
 - 11) 1913年にニューヨークの第69連隊兵器工場で開催された「国際現代美術展」、アメリカ美術に加えフォービズム、キュビズムなどのヨーロッパの近代美術を紹介した展覧会。
 - 12) *Catalogue of The Tenth Annual Exhibition of The Society of Independent Artists*, [Exhibition Catalogue] (New York: The Waldorf Astoria, 1926) に藤岡昇《アメリカ魂》、平本正次《踊女》、石垣栄太郎《行列聖歌 1925》、清水清《十四丁目》、角南壯一《ダイクマンのテニスコート (Dyckman Tennis Court)》、渡辺寅次郎《瀧 (Over The Fall)》の図版がある。
 - 13) 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察 (1)」『和歌山県立近代美術館紀要』第1号（1996年）、21頁では、*The World Telegram* 掲載とあるが、Forbes Watson “Independent Exhibition Has Over a Thousand Works by Beginners and Experts” *The World*, 21 March 1926 に掲載されている。
 - 14) 同作品は二つに切断され、《街》というタイトルで右半分が神奈川県立近代美術館、左半分が和歌山県立近代美術館にそれぞれ所蔵されている。
 - 15) “Academy of Design Reaches a New Age” *The New York Times Magazine*, 21 March 1926
 - 16) Clark S. Marlbor, *The Salons of America 1922-1936* (Madison Connecticut: Sound View Press, 1991)
 - 17) 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察 (1)」『和歌山県立近代美術館紀要』第1号（1996年）、21頁では掲載紙不明とあるが、Margaret Breuning “The Salons of America and the Outworn Cause of Artistic Freedom—other notes of the Week in the World of Art” *The New York Evening Post*, 31 October 1925 に掲載されている。
 - 18) 東京国立近代美術館所蔵。また同作品は1918年 The National Academy (Peter Hastings Falk, *The Annual Exhibition Record of the National Academy of Design 1901-1950* Madison Connecticut: Sound View Press, 1990:282) ; 1919年 The Art Institute of Chicago (Peter Hastings Falk, *The Annual Exhibition Record of The Art Institute of Chicago 1888-1950* Madison Connecticut: Sound View Press 1990:469) ; 1921年 The Pennsylvania Academy (Peter Hastings Falk, *The Annual Exhibition Record of the Pennsylvania Academy of the Fine Arts Vol.3* Madison Connecticut: Sound View Press, 1989:248) に出品された。
 - 19) 横浜美術館所蔵。同作品は1921年の The Society of Independent Artists、同年の The Art Institute of Chicago の年次展覧会に《Impression of Yokohama》の題名で出品されている。Augusts 賞取り消しについては “Chicago Overrides Jury and Bars Jap” *American Art News*, 12 November 1921, 「籠欄」『紐育新報』1921年11月5日に関連記事がある。
 - 20) 出品目録は、和歌山県太地町立石垣記念館所蔵。
 - 21) 「本社主催「邦人美術展」来年二月一日より二週間に亘り東部在留邦人美術家を網羅して」『紐育新報』1926年11月17日。
 - 22) 「邦人美術展」『紐育新報』1927年2月12日。
 - 23) 「日本文化学会産まる」『紐育新報』1929年8月3日。
 - 24) 角田柳作「The Japanese Culture Centre の創立に就て」『本邦ニ於ケル文化研究並同事業関係雑件』(1926年) 外交資料館所蔵。
 - 25) 「紐育に創設せらるる日本の文化的事業 紐育日本人会書記長 角田柳作氏意見」(上),(下)『紐育新報』1926年10月13日、16日。
 - 26) 角田柳作『書齋・学校・社会』(布哇便利社出版部, 1917年), 271頁
 - 27) 前掲22)
 - 28) 前掲21)
 - 29) 坡土遜小叟「曼陀羅と達磨」『紐育新報』1931年12月30日。
 - 30) 「紐育新報社主催第一回邦人美術展覧会規定」『紐育新報』1926年12月4日。

『紐育新報』と邦人美術展覧会（佐藤）

- 31) 「近代派官学派入乱れて 咲誇る邦人美術展」『紐育新報』1927年2月19日。
- 32) Elizabeth Carey “An American A Slav and Some Japanese Painters “Westernized” Japanese” *The New York Times*, 20 February 1927.
- 33) 「尊い日本人の伝統を捨て乍ら 泰西化し切れない美術展 タイムスのケリー女史が鋭い批評【アート・センターに於ける邦人美術展の賑ひ】」『紐育新報』1927年2月26日。
また、同じ記事の翻訳に「紐育新報主催美術展の批判 英字新聞美術記者により」『日米時報』1927年2月26日がある。
- 34) Royal Cochise “The Modern Japanese How He Functions as an Artist in the Western World” *The New York Herald Tribune*, 20 February 1927.
- 35) 「「日本人味」を忘れないで 特色のある美術展 ヘラルド トリビューン紙の批評 昨今売約の交渉がぼつりぼつり」『紐育新報』1927年2月23日。また、同じ記事を翻訳に「紐育新報主催美術展の批判 英字新聞美術記者により」『日米時報』1927年2月26日がある。
- 36) Ralph Flint “New York Art Miscellany” *The Christian Science Monitor*, 24 February 1927.
- 37) 「三月五日に閉会する 第一回邦人美術展 米人批評家の眼に映じた日本人 モーダニスト 伝統的な日本画」『紐育新報』1927年3月2日。
- 38) Margret Breuning “Japanese Artists” *The New York Evening post*, 26 February 1927.
- 39) 前掲 37)
- 40) 国吉康雄 「美術我観」『紐育新報』1922年2月18日。
- 41) 国吉康雄 「同人の叫び」『日米時報』1927年4月30日。また美術同人会については、国吉康雄 「美術同人会」『紐育新報』1927年4月30日にも掲載記事がある。

